

フィジー諸島における初期の文化接触変容

溝 口 靖 夫

南太平洋の地図を見るならば、東に、タヒチ島を中心とするフランス領の植民地である東部ポリネシア諸島があり、北に、アメリカ領のハワイ諸島があり、西に、イギリス領の植民地である東部メラネシア諸島が散在する。このイギリス領諸島は、ハワイとニュージールランドを結ぶ線の上にあり、今般水爆実験で有名になったクリスマス島はその線の東北端近くに位し、フィジー諸島はその線の西南端近くに存在する。

私はさきに、南太平洋の列国の植民と基督教との歴史的関係について考察する機会があつたが、⁽¹⁾本号には引続き、布教と植民を主として、文明民族と未開種族の間の文化接触並びにその変容過程について、概観を試みたいのである。これを見る角度として、文化を伝達した側から見る場合とこれを受容した側から見る場合とが考えられるが、実際問題としては、未開種族の場合には過去の記録がなく、資料に乏しいため、概して植民者側の記録に基き、これを手懸りとして、当時の実状を判断するという方法をとることになるのである。しかしでき得るかぎり、両者の一方に偏しない客観的な理解に努めることが望ましい。

フィジー諸島は約二五〇の島々から成つてゐる。その中約八〇の島に人が住んでおり、フィジーの本来の名はヴィティ(Viti)⁽²⁾であつた。ヴィティ島が、このグループで一番大きい島である。

住民はメラネシア系とポリネシア系との混雑で、普通メラネシア系に入られている。この諸島の西に行くほど皮膚の色が黒く、頭髮が縮れてニグロ的な特徴がふえ、東に寄る程ポリネシア的な優美な顔立や均衡のとれた肢体の特

徴が濃くなる。伝説によると祖先はソロモン諸島或いはニュー・ヘブリディーズ諸島あたりから渡来したものとされており、前者はブッシュメンを主とし、後者はパプア人を主とするもので、フィジーは元来メラネシア系が主流であるが、比較的後年にポリネシア系が流れ込んだものと考えられている。全体的に純粹のポリネシア系よりも慄悍であり、暗黒色の種族である。

この地がはじめて発見されたのは一六四三年で、オランダ人の探検家タスマンが二月六日この諸島中の東北の數島を発見した。更に一七七三年イギリスの探検家ジェームス・クックは第二回の探検旅行中本諸島の東南端のヴァトア島（又はタートル島とも称する）を発見した。一七八九年に英軍艦バウンティ号の反乱のとき、ブライ艦長は若干の部下とともにボートで追放されてこの水域に來たが住民の反抗に出会つて立去つた。³⁾その後、一八〇四年にはオーストラリアから逃亡した囚人や水夫二十余名が本諸島に來り、ヴィティレヴ島の東岸に居住した。彼等は附近の酋長達に銃器の使用で威力を示した。島民にとつて、敵に近付かないで相手をたおすことのできる彼等は超人間的なものと思へた。彼等は附近の酋長達を助けて他の酋長に対する優位を与えたのである。この事件以來、この諸島がヨーロッパ人の注意をひくこととなり、これ以來白人の到來が徐々にふえたのである。一八〇六年の頃には、捕鯨業者や貿易業者達が往來する様になつた。商人達は中国人に賣るための白檀やなまこを求めに來るのであつたが、ヨーロッパ人にこの島のことを伝えるのは専らこの人々であつた。⁴⁾

この地にはじめて基督教が伝つたのは一八三〇年で、当時ポリネシア諸島の伝道中であつたジョン・ウィリアムスにより、二人のタヒチ人の伝道師が送られて來た。彼等は、フィジー諸島中の東部に位するラケンバ島に上陸して、ここで伝道することとなつた。しかし間もなく迫害が起り、これより東南四十キロばかりにあるオネアタ島に移り、そこにチャペルを建て、自ら作物をつくり魚をとつて暮しをたて伝道に従事したが、余り影響が現われなかつた。彼等はフィジー語が殆んど話せなかつたから、これが最大のハンディキャップになつたものらしい。⁵⁾

次に本格的な伝道が始められたのは、一八三五年からである。今度はフィジー諸島の東南に隣接するトンガ諸島に伝道中であつたイギリス系のウェスレイアン・メソジスト外国伝道協会からのほたらきによるものであつた。トンガ諸島では、これよりさき、一七九七年ロンドン外国伝道協会により伝道が開始されたが犠牲者を出して一八〇一年に伝道者達はシドニーに引揚げた。その後一八二二年からウェスレイアン・メソジスト派から伝道者が来島し、今度は成功し、伝道は着々進捗していたが、一八三四年に至り、大伝道の氣運が訪れた。この年、数千人のものが基督教に改宗したのであつた。彼等は従来の罪を悔改めて、新しい生活に入りたいと決心をしたのであるが、この時、この地の王と王妃もまた基督教を信奉して非常な喜びの中に救いを體驗したのである。かねて、彼等はフィジー島民との間に交渉をもつていたが、彼等が基督教に改宗して先ず感じたのは、フィジー島におけるいくたの旧来の風俗習慣がいかにか恐るべきものであるかということであつた。かくて、トンガの王であるジョージ・ツボウ (George Tubou) は、この新しき教えをフィジー島にも伝えようと計画したのである。一八三四年十二月にトンガ地方の基督教會議が開かれ、トンガの教会から宣教師をフィジー島へ送ることが決つた。そして選ばれたのがウェスレイアン・メソジスト外国伝道協会のウィリアム・クロス牧師 (William Cross) とデイヴィッド・カージル牧師 (David Cargill) の二名であつた。前者はトンガに八年間伝道中であり、後者は二年間トンガで伝道していたものである。この二人は出かける前に先ずフィジー語の勉強をし、又、トンガに印刷機があつたので、それで四頁の伝道用小冊子と、短い「教義問答」の冊子を印刷していよいよフィジー島に向うことになつた。

一八三五年十月八日、クロスとカージルの二人はそれぞれ妻や子供らを連れて、相共にトンガを出帆し、同月十二日フィジー諸島中の前述のラケンバ島に到着した。二人がボートで海辺に近づくと、海岸には二百名ばかりの人々が右往左往しているのが見えた。彼等は或いは小銃をもち、或いは長い棒の先に銃剣をつけ、又槍や棍棒や、弓矢等で身を固めたもので、顔には赤や黒で色を塗り、見るからに恐ろしい姿であつた。これはどこからか未知の人間がやつ

て来たときいつも住民がこれに対して立ち向う仕方であつた。彼等は既にこれより前白人達から銃器をも手に入れたので、彼等と対面することは全く決死の冒険であつた。しかし幸い宣教師達は島の王が彼等に会いたい意志をもっていることを告げられたので、上陸して会見した。王は来意を知ると快く彼等を迎えることにした。この最初の会見で好都合であつたのは、宣教師達が語つたトンガ語が住民によく理解されたことである。トンガ島とは従来往來が盛んであつたので、トンガの言葉であれば互に通訳がいらなかつたのである。更に好都合であつたのは、トンガ島のジョージ王から、ラケンバ島の王ツイ・ナヤウ (Tui Naya'u) に対して、贈物を携えて使者を同行せしめ、宣教師をねんごろに迎えるよう勧めてくれたことである。ジョージは又、宣教師を受容れることによつて彼自身も人民もどんな幸いを体験したかを使者をして伝えしめたのである。かくて、宣教師達はこの最も恐るべき食人種であつたフィジー人の中に家族をつれて無事に入り込み、又、海岸近くに少しばかりの土地を与えられ、家屋を建てることを許されたのである。これがフィジー諸島の実質上の伝道の端緒となつたのである。

十月十八日は日曜日で最初の聖日礼拝が行われた。宣教師達は屋外で集会をしたが、集るものフィジー人及び当地に在住のトンガ人等合せて一五〇名ばかりであつた。この島にはこれより先き、すでに若干のトンガ島から来たトンガ人の基督教信徒も存在したので伝道には好都合であつた。この集会には、このラケンバ島の王も招かれたが、説教はトンガ語でなされたので、会衆に理解され、注目をひくことができた。かくて宣教師達は幸先よき伝道のスタートをなすことができたのである。

彼等は先ずフィジー語の習得に力を注いだ。彼等が出発前トンガ島で考案したフィジー語のアルファベットによる表現方法に不十分な点が見付かつたのでこれの改良に力をつくした。その目的の重要なものは聖書のフィジー語への翻訳であつた。彼等は既にトンガ語を知つていたからフィジー語をおぼえるのには大なる困難はなかつたが、トンガ島からつれて来たフィジー人の伝道師達の助けをかりて、翻訳事業は段々進み、間もなくマタイによる福音書の初

めの部を訳し、これをトンガ島の印刷機で二十四頁に印刷しラケンバに送らせた。これには山上の垂訓の部分も含まれていた。で伝道上有益であつた。彼等はイギリス本国に印刷機とその技術師を送るよう熱心に依頼した。そして伝道のかたわら、フィジー語の文法と辞書へんさんが始められた。又聖書の翻譯も日々に進み、一八三九年にはマルコによる福音書が、一八四七年には新約聖書が、一八五四年には旧約聖書の創世記・出エジプト記・詩篇等が訳され、又一八四〇年までに印刷機も到着し、この地で印刷ができるようになった。

イギリス人の到来は、この様に、島民の生活様式に新しい時期を劃するものであつた。人々は遠さもとわず宣教師の家を訪れるのであつた。そしてただ基督教を教えられただけでなく、部屋の中に案内され珍らしい家具や道具を見るのは驚異であつた。宣教師達の生活の方法としては、いろいろな道具と食物を交換する方法がとられた。斧・手斧・のみ・ナイフ・かみそり・鉄びんなどとか布や紙類等が豚・鶏・魚・かに・果物・野菜等と交換され、又、垣や建物や庭の手入れとかその他の手伝い等に日用の道具が与えられた。しかるにこの島でも他の種族におけるように盗み癖が強く、室内に入る来客には周到なる注意が要するという有様であつた。このように珍らしき器物が魅力となつて人々を惹きつけたのは、白人の植民又は外交等において殆んど例外がないのであるが、フィジー島で困つたのは、宣教師達と外部との連絡が困難であつたことである。故国からの便りの如きも十五箇月から十八箇月位かかるのであつた。それでこの地の宣教師達の持物が段々乏しくなり、非常な不安にとざされていたとき、幸にして一八三八年八月イギリス軍艦コンウェイ号が到来して必要品を補つてくれたので助かつた。初代のこの地の宣教師達の手記を見るならば、当時の未開地の伝道、殊にこの様な食人種の間における太平洋の島々の伝道が、子供らをかかえてどんなに困難に満ちたものであつたかは想像を絶するものである。のみならず一度病氣にかかるならば、医薬の助けも意のままにならず、全く心細い限りであつた。最初の宣教師の一人であるクロス牧師の如きも遂に健康を害し、一時はこの地を引揚げねばならなくなつていた程である。

さて、クロス牧師とカーシル牧師によるラケンバ伝道は最初好調であつた。到着の翌年一八三六年の初め新教会堂が建ち、集会毎に約二百名の会衆が集つた。教会の集会は幾組にも分けて行われ、又、教会堂に凡ての年令を一緒にした学校が開かれた。三月二十日には三十一名が洗礼を受けた。しかるに、伝道が進むにつれて、他の方面から困難が現れた。土地の固有宗教家の反対であつた。というのは、基督教を信ずるに至ると、人々は聖日には労働をしなくなるし、又、畑の初物ができてこれを神々に供えようとなし、そして固有の神々を無視するという有様であるので、既成宗教の祭司達の反撥に出会つたのである。彼等は土地の神々が怒りを発して天地に異変が起り外来の宣教師の一団は滅び、島の王達が栄える日の来るべきを予言した。この様な現象は反文化接觸変容 (Contra-acculturation) の現象として理解されるものであり、しばしば終末的予言を伴うメシア的運動となることが多い。

もう一つの困難は、このラケンバ島の王であるツイ・ナヤウが一時基督教に好意を寄せ、基督教を信奉する意志を示したのであるが、その後これを打消すに至つたことである。というのは、彼はフィジー諸島全地域の王ではなかつたから、先ずフィジー最大のヴィティ・レヴ島のムバウの王であるとか、ソモソモ島の王であるとかの如き最有勢なる王が基督教を信ずるのでなければ、これに改宗することはできないと宣言したのである。これは当時のフィジーにおける権威主義的又階級的な社会においては極めて自然のことであつた。しかしこれが却つて宣教師達にとつて、ラケンバ島からヴィティ・レヴの本島その他に進出する好機会を与えたものである。そこで彼等二人の宣教師のうち先ずクロス牧師が一八三七年末家族をつれてラケンバを出帆し、翌一月八日にヴィティ・レヴ島のレワに到着し、ここを新たな伝道地と定めたのである。

当時、この島ではタコンバウ (Thakombau, or Sakobau, 1817—1884) というものが王者の立場にあつた。彼は「フィジー島のナポレオン」と呼ばれる様に権力を占めていた。この人物は、フランスに対するタヒチ島のポマレ女王の立場又はアメリカに対するハワイのカメハメハ王の立場に相当する地位にあり、イギリスのこの地の植民史上最

も重要な人物である。

しかし、彼も亦、当時のフィジー社会の低度の文化の中に活動していたものであり、この人物を基督教的文化のレベルに引上げることがまことに容易ならぬことであつた。この未開のレベルから高度の文化のレベルに引き上げると、これが文化人類学における文化接融変容—acculturation—の本来的意義であつたもののようである。フィジーの場合は全くこの範疇におけるアカルチュレーションの現象であつたと云い得るのである。

即ち、宣教師が到来した当時のフィジー社会は前述の如く太平洋においても最も典型的な食人風習の存在したところであり、人身犠牲の存したところである。その食人の風習は、儀礼的な理由又は食料不足からというよりもむしろ嗜好としてこれが行われたところに原始的な性格が存在する様に思われる。その食人の風習は徹底的であり、単に戦で獲た敵の捕虜などだけではなく、友人であるとか肉親のものさえこれに供されたのである。また来客に饗応するためにも人肉が食膳に供され、又これを豊富にいつでも供え得ることは、勢力を示すバロメーターであつた。故に酋長の如きは常に食用のため多くの人間を用意しておくのであり、又、しばしば生きたまま火にあぶつて人の肉を食するのであつた。宣教師達がこれを戒めたのは勿論であるが、白人の植民史、伝道史における文化接融変容の現象として先ず挙げねばならないのは、この様な低いレベルの風習が高揚されて、全く異質的なものに変容されたということである。人身犠牲も宣教師の心を痛めたものであり、建築⁸のときの人柱であるとか、夫が死んだときの妻の殉死であるとか、これらはこの地に限られない。往時、広く行われている風習である。又、嬰兒殺しや、老人を棄てる風習なども同様である。

結婚形態も一夫多妻制であり、妻の数はその勢力を示すものと考えられ、多きものは百人から五百人位の妻を有したのである。この様な状態にあつたフィジー人に対して、宣教師達は基督教の高い道德を教え、これを今日の文化の水準に高めたことは記憶しなければならない。

しかし、他面では、白人の捕鯨船の乗組員であるとか水兵であるとか、貿易業者達の往来により、島民に破滅的な悪影響を齎したことも疑いない。白人到来の初期の頃である一八〇〇年の頃には人口は約二十五万又は十五万人と推定されたのであるが、これが約八万五千位になったことがある。その原因はいろいろであるが麻疹・チブスその他性病等の病気や又外国人のもたらした強い酒類などによつて、又、生活様式の変化とともにそれに適合し得ないためのいわゆる環境に対する不調整等によつてかくは人口が激減したものであらう。しかし近年においては、再び新たな適合、調整が行われ、又外来の人口をも加えて人口は漸増の傾向になり、一九四四年には二一五、〇〇〇人と推算されている。

以上は、フィジー島民が外来の民族特にイギリス人宣教師達との接触により受けたところの生活及び文化様式の変容である。しかし更に、文化接触変容上重要な問題は政治及び経済問題である。経済について一言すれば、原始的な未開の経済様式から、現在は他の太平洋諸地域における如く、全く近代農業の域に達したことは驚くべきことである。砂糖、コブラ、果実等は重要農業産物であり、鑛業、漁業、林業、牧畜業等も盛んであり、輸出品としては、砂糖・コブラ・糖蜜・バナナ・金・ゴム・石けん・獣皮・椰子油・べつこう・なまこ・綿・パイナップル等がある。これらも大体、他の未開地域における経済変化と殆んど同様である。そこで次に、特に問題としたいのは、政治的な変容であり、これがハワイ及びタヒチ等と同じく、複合的な接触関係をもつたところに特徴が見られるのである。ここでも英仏米の三国が三つ巴になつて、フィジーの舞台に活動したのである。これをわれわれは複合的文化接触変容 (Complex acculturation) と呼び得るであらう。しかしここでも単に政治的勢力だけでなく、宣教師達が直接・間接これに関与しているのである。ハワイにおいては英仏米が現われたがアメリカの勢力が他を圧倒し、タヒチでは先ずスペインが、次に英仏が現われたが、フランスが領有をとげ、フィジーでは英仏米が関与したが結局イギリスが最後に残つたのである。しかも、そこには或いは必然的な、或いは偶然的な諸種の傾向が見られるのであり、具体的に

は、次の様な数個の歴史的事件の連鎖によつて、フィジー島の帰趨が定つたわけである。以下これを概観したい。

第一の事件。一八四九年ヴィティレヴ島在留のアメリカ領事ジョン・ビー・ウィリアムスに關して一事件が勃発した。彼はこの諸島中のスクラウ島と稱する小島をレヴ島の酋長ヌガレンゲオから買収し、その島に在留していたが、この酋長はヴィティレヴ島のタコンバウ⁽¹⁾と対立關係にあつた。しかるに、ウィリアムスはこの年七月四日アメリカの獨立記念日に當り、祝砲を鳴らして慶祝の最中に彼の家が突如火を發して焼失した。この火事場に住民は群り來つて彼の家財一切を掠奪してしまつたのである。

その翌々年の一八五一年アメリカ軍艦聖メリー号が來島し、その艦長マグリューダーはこの島に上陸した。この機会に、領事ウィリアムスは火災に際しての盜難の損害賠償につきマグリューダーに會見し、総計五〇〇一ドル三八セントを住民の責任者から取立てるよう相談したのである。けれども、艦長は急ぎの航海中であるとの理由により、イギリス人ウエスレイアンの宣教師カールバート (J. Calvert) とアメリカ人フィッシャー (David Whippy, U.S.A. Vice Commercial-Agent) に調停方を依頼し、次に來港のアメリカ軍艦の指令官に事件を報告するよう託して立去つたのである。しかるに、次の軍艦が到來する前に又次の事件が起つた⁽²⁾。

第二の事件。一八五三年、オバラウ島のレヴカ港の白人所有の一艘の船がマラキ島において掠奪に遭つた。その時乗員の三名が逃れて報知したので、レヴカから鷹獵の軍が來襲しマラキ島を焼打にした。その後白人側では、マラキ島の酋長はタコンバウの臣下であるので必ずタコンバウはレヴカに報復に來るに違いないと宣伝し、警戒をゆるめなかつたのである。絶えず見張人を立てていたにもかかわらず、レヴカは焼打された。そこで、その下手人はタコンバウであると断定された。又これを証言するものも現われてタコンバウが責任者とされた。しかしタコンバウ自身は極力事件に何の關係もないことを主張したが駄目だつた。

一八五五年九月になり、アメリカ軍艦ジョン・アダムス号がブートウェルの指揮の下に入港した。ウィリアムス領事

はそこでブートウエル艦長に、損害賠償の件につき応援を乞うたのである。ブートウエルは、タコンバウが前述の第一と第二の二つの事件の責任者であるとの想定のもとに、それ以上何等の調査をもしないで、タコンバウに対して最後通牒を発し、三万ドルの賠償またはそれに相当する魚類・椰子・豚などを十二ヶ月間にウイリアムスに対して弁償すべきことを通報した。賠償金はレヴカのアメリカ人に分配さるべく、特にその中ウイリアムス自身の要求は一万五千ドルに値上げされたのである。

これより先き、タコンバウはラケバ島の有力なる酋長マアフとかねて対立関係にあつたが、一八五四年にマアフはタコンバウに戦を挑んできた。タコンバウは形勢不利なるを見てイギリス人宣教師に助けを求めた。しかしアメリカ軍艦のブートウエル艦長は、事件にイギリス人宣教師が介入すべきでないと抗議を申込んだのである。この様な危機に際し、十月九日アメリカ軍艦聖メリー号が来島した。指令官ベイリーは必ずしもブートウエルの主張に賛同したわけではないが、事件を彼の手にまかせ、さらに事実の調査を勧めて立去つた。ブートウエルはそこで艦上でタコンバウを召喚し事件の詳細を調べることになつた。このときタコンバウの側にはイギリス人のウエスレイアンの宣教師ウオーターハウスが代弁者として付添つた。その会見の結果、アメリカ側の要求は正当のものと認められ、ブートウエルは彼の賠償全要求をさらに一万五千ドル増加した。またアメリカ領事ウイリアムスの要求額も三三八一ドル増加されたのである。

このとき現われたのがブリッチャードである。一八五七年九月二十八日、ブリッチャード (Pritchard, Jr.) がフィジー諸島のイギリス領事として着任した。彼はタヒチ島のイギリス領事であつた元宣教師ブリッチャードの子であり、父はタヒチ島で同島の支配権に関し、フランスとの政治的折衝にあたり、イギリスのためにつくしたが、遂にフランスのために苦杯を嘗めさせられたものである。⁽¹²⁾ タヒチの領事ブリッチャードは一八四三年タヒチがフランスの保護領になつてから、サモアの領事となつたが、フィジー諸島はサモアの管轄区域内にあつたから、タヒチでの失敗を

フィジーで挽回すべく心を用いたことであろう。いまその子がフィジー島のイギリス領事として赴任したのである。ブリッチャード・デュニアがフィジー島に來た当時の米英兩國の關係は前述の如くであつた。その翌年の一八五八年には、アメリカ側の要求した賠償金はまだ支払われていなかった。そこでイギリス宣教師はタコンパウにフィジー島の主權を譲るよう勧告し、賠償金はイギリス政府からアメリカに支払うことを取決めた。この折衝の裏にはブリッチャードが存在したことは明かであると考えられている。タコンパウは事ここに至つては施すすべもなく、宣教師のすすめに聽従せざるを得なかつた。

第三の事件。一八五八年八月レヴカに在住のイギリス人ウェスレイアン宣教師のビンナー (J. Binner) 所有の船がワエア島に向つた。それに乗合せたのはイギリス人一名、アメリカ人一名、及び数名の住民であつたが、ワエア島人は彼等を捕えて食べてしまつたのである。

このときアメリカ軍艦ヴァンダリア号が入港した。その艦長シンクレアはただちに五十人から成る討伐軍を組織し、ワエア島に向つた。島民は五百の人員をもつてこれに備えたが、アメリカ軍に追いつめられ、この島の海拔八〇〇メートルの山頂において撃破された。アメリカ軍の損害はわずか五人を出したのみであつた。これに引続きシンクレアはフィジーの王としてタコンパウを召喚し、アメリカ政府からの賠償金四万五千ドルを要求した。タコンパウはヴァンダリア艦上でこれに応じ、要求額の支払に十二ヶ月の猶予を乞うたのである。もちろん彼はその支払能力のないことを知つていたので、ブリッチャードに相談したが、これに対してブリッチャードは、フィジー島のイギリスへの譲渡を勧懲し、一八五九年十二月十四日、タコンパウは、一八五八年十月十二日の同島譲渡の約束を再確認したのである。即ち、イギリスがタコンパウに代つてアメリカに支払う賠償金の代償として、この地域の全諸島を含む二十万エーカーの土地をイギリスに譲渡することを決定した。これは單にタコンパウ一人の意志ではなく、全酋長の意志である旨、契約署名された。

当時南太平洋における列強の勢力を見るとフランスがイギリスの唯一の競争者である。ドイツはまだ太平洋ではそれほど準備が進んでいなかった。アメリカはこの事件について利害関係が最も濃厚であつたが、リンカーン以前のアメリカは未だに太平洋における植民的関心が後日の如くでなかった。

太平洋植民史上、イギリスとフランスとの角逐において、つねにこれと並行して観られるのは、プロテスタントの布教とカトリックの布教である。ハワイでも、タヒチでもフィジーでもこれが見られる。

フィジー島民とフランス人との接触は、先ず当地に來航の船艦により始められた。一八三五年、フランス船がフィジーに通商の目的で來島るとき、ヴィワ島の酋長ヴェラニは船上で船長と商談をしていたが、ムバウ島の酋長らの勧めによりこの船の船長を殺し、その船を分捕つたのである。船員は逃れてオバラ島に到り、辛うじて生命を得たという事件があつた。これより二年後、一八三七年二艘のフランス軍艦がヴィワ島に來航し、島民の家を焼払つた。

カトリックの布教は一八四二年に始つた。この年西太平洋州代牧区のボンパリエ司教により土着の教師が一人ラケンバに送られ、又、一八四四年には中部太平洋州代牧区のバタイヨン司教により数名のヨーロッパ人の宣教師がラケンバに派遣された。彼等はイギリス宣教師の伝道と對抗的立場におかれ、又酋長達の間に争いが絶えず、種々困難が生じ、一八五一年には、伝道は殆んど壊滅に瀕したが、このとき、バタイヨンは宣教師を増強し、又ミツシヨンの支部をふやしてこれに対処したので、だんだん信徒がふえた。¹⁴⁾

第四の事件。一八六一年、次の事件が起つた。この年九月フランスの軍艦コルネリエが艦長レヴェーク指揮の下にレヴカ港に現われた。このときこの地のフランス・カトリック宣教師の長であつた神父ブレエレ（Père Bréhéret）は艦長に対し、次の事件を訴えた。即ち、それより少し前、トンガ島の酋長であつたセミシなるものがユサワ島においてローマ・カトリックの教徒である住民を殺したというのである。この訴えにより艦長はフィジー島王タコンバウと当時フィジー在留のトンガ島代表酋長マアフとを召喚し、カンダヴ島に潜伏するセミシを引渡すよう命じたのであ

る。しかしタコンバウは酋長の要求するほど速かにこれを実現することができなかった。セミシの現われるまで
コルネリエ艦上に抑留されることとなつた。やがてセミシが来たが、タコンバウは事件の証人としてなお艦上に留
めおかれた。セミシが調べられるにあたり、マアフはセミシがかのカタリック信者を殺したのは宗教上の理由からで
はないと弁護した。しかし神父ブレエレはそれが宗教の故であつたことを主張して引かなかつた。その中に、一八六
一年十月十日コルネリエ号はこの島を出帆してニューカレドニアに向つたが、そのときセミシを捕えたまま立去つた
のである。このとき、フィジー人はブリッチャードの許に來り、フランス人のこの処置に対して抗議を申込んでくれ
るよう懇願したが、ブリッチャードはフランスとの關係を考慮して、事件に介入しなかつた。島民は彼に不満を表明
したが、このときイギリス人宣教師カールバートが島民とブリッチャードとの間に立つて、ようやく島民を慰めるこ
とができた。¹⁰⁾これにより、フィジー諸島におけるイギリスとフランスとの対立の危機は去り、イギリスの従前の地歩
は確保されたのである。

以上は主として、フィジー島内におけるイギリス人の島民への工作についてであつたが、次には彼等のイギリス本
国政府との手續が問題となつた。当時のイギリス政府は未だフィジー諸島の重要性を、出先官憲及び宣教師ほど認識
していなかつたので、これを本国に懇えるのには相當の苦心を要したのである。

この間、ブリッチャードは一八五八年十一月三日フツジー島を出発し、ジョン・ウェスレー号でシドニー經由本国
に向い、翌一八五九年初め母国に到着し、諸方面に実狀を懇えた。彼の一八五九年三月二十八日付政府への具申書に
は次の様に記されていた。

「ポリネシア人を容易に且つ見事に統率するためには彼等よりも道德的に優越であることが必要である。これに成
功すれば、彼等を統御することはいと容易である。彼等の信頼を充分に得るためには、わが方の私心を交えない動
機により彼等一人一人の福祉が促進されることが肝要である。宣教師こそは、真に彼等島民の上に比類なき且つ根

強き影響力を有するものであり、それは彼等の信条と教派とを超越する島民に対する協調的精神と清廉なる行動によつて得られる不変の道義力に負うものである。⁽¹⁶⁾」

ブリッチャードは一八五九年夏、イギリスをたつてその年十一月一日約一年の旅行を終えてフィジー島に帰着した。帰任後前述の如く、同年十二月の酋長との会議となつたのである。

これに引続き本国政府の指令に基いて、スミス (Colonel Smythe) がフィジーにブリッチャードの具申の実状調査に派遣され、一八六〇年七月レヴカに到着した。この時ブリッチャードはスミスに次の如く建言している。

「小官の確知するところによれば、フィジー島民が白人の侵入 (encroachment) に抗し難きを自覚したことは明白な事実である。彼等の所見によれば、同島を大英帝国に譲渡することは、多くの不幸中の最小の犠牲であると信じられているものの如くである。大英帝国は他のいかなる国家よりも、彼等にとつてより希わしき主人 (master) であるとは彼等の信じて疑わないところである。ここをもつて、フィジー島は、その諸島の主権を挙げてイギリス女王に譲渡しようとする真摯な希望を懐けるものであると考える。」⁽¹⁷⁾

これに対して、スミスの本国への報告によれば、酋長達が諸島をイギリスに譲渡したいとの希望を有することは事実として確認された。但し次の点でブリッチャードと見解を異にした。(一) タコンバウはフィジー諸島における最有能力な酋長ではあるが、フィジー王 (Tui Viti) と称するにはふさわしくないこと。(二) 彼はイギリス女王に献ずる土地として二十五万エーカーを所有するとは測定し難いこと。(三) シドニーからパナマに至る最短交通路はフィジー島を通過せず、太平洋のこれよりもはるか南方を過ぎること。及びフィジー島領有により大なる利益を得るものと信ずることはできない。そのみでなく、住民の三分の一は基督教を信奉するとは云え、残りのものは未だに食人の風習が絶えず、又、寡婦殺し、嬰兒殺し、その他種々なる悪い慣習がひろがり、これを矯正するのは容易でないこと。経済的に見ても綿花の栽培には充分な労働力を得るために非常な困難があり、経営上収支償うかどうか疑わしい。軍

事上でもオーストラリア及びニュージールランドを領有した今日、その地域の治安は既に確保されたものと云い得るが、いま又、フィジー島を領有するならば、新たに軍艦一隻と一箇連隊の駐屯を必要とするであらうし、この諸島の自給自足に至るまでには、かなり長年月を必要とする。かかる理由により、スミスはブリッチャードの建築を採択することの不利であることを報告したと云われている。¹⁸⁾

これでブリッチャードなどの努力も一時頓座の形勢に見えたのであるが、イギリスのフィジー領有に拍車をかけた他の事態が起つてきた。それはこの島における労働者徵募統制に関するものであつた。南北戦争中、アメリカの綿花栽培が打撃を受けた結果、太平洋地域に綿花景気が起つてきた。オーストラリアのクインスランドにも、ニューカレドニアにも、ハワイにも、サモア及びパプアにも綿花の需要が起つて来た。フィジー島とクインスランドにはニューヘブリディーズ島、ソロモン群島及びポリネシア地域の諸島から労働力が移入された。一八六四年から一八六八年の間に、フィジー島にニューヘブリディーズ及びギルバート島のみからでも一六四九人の労働者が運び込まれた。その労働者の徵募に当つては、しばしば脅嚇や、詐欺及び誘拐などの不徳が大々的に行われたので、ニューヘブリディーズ島の長老派の宣教師であるとか、ノーフォーク島のイギリス系宣教師達の反対があり、母国やオーストラリアでもそれは問題となつた。けれども、宣教師の言は主として土人の申出によるものであり、事態の具体的な証拠が法的に不充分であつたので、政府も適當の処置を取りかねていた。このとき次のような事件が起つた。

第五の事件。一八七二年。サンタクルーズ島において、宣教師パッテソン (Bishop Patteson) が殺された。しかしてそれは白人の住民誘拐に関する住民の復讐であると解されたので、オーストラリア及びイギリス本国において問題となつた。その結果、イギリスの議会は住民の誘拐を重罪とし、労働者移入に関しては免許制としたのである。

以上は住民側の白人に対する事件であつたが、他面、白人側も相変らず住民の誘拐と虐待の態度を改めず、南太平洋の労働問題はいよいよ事態切迫を思わせるものがあつた。一八七一年六月から十月にかけてオーストラリアから二

ユーヘブリディーズ及びソロモン群島向け航海中のメルボルンの船舶カール号において、誘拐された労働者が叛乱を起し、その結果彼等の中五十名が射殺された。そして死体は海中に投ぜられたのである。この船はイギリス軍艦ロザリオ号の艦長により臨検されたが、そのときはもはや住民射殺に関する証拠は全然残っていないかった。その次の航海のときも百名の住民が誘拐されたが、ついに一八七二年十一月カール号の船長は住民誘拐及び殺害の罪状で訴えられた。

ここにおいて、当時フィジー島の政府の顧問の地位にあつたサーストン (Thurston) は、翌一八七三年一月母国政府に対してフィジー島のイギリスによる領有が行政上絶対に必要であることを提議した。又フィジー島のイギリス領事レイアード (Layard) もイギリス政府に同様の意見を上申したので、一八七四年七月十六日、イギリスの植民大臣はニューサウスウェールズの総督ロビンソンに対してイギリス政府が正式にフィジー諸島の合併を決定した旨通告した。⁽¹⁹⁾同時にロビンソンに対してフィジー島の現地視察を命じたのである。彼は指令官グッドイナフの指揮する軍艦パール号に便乗して同年九月十二日シドニーを出帆し、同月二十三日フィジーのレヴカに到着、二日後タコンバウに会見し、同人の意見を徴した。このときタコンバウはすでにかねてから決意していた通り、同諸島をイギリス女王に譲渡すべく同島民の意志を開陳した。そしてついに一八七四年十月十日同島の全酋長はノソカに集り、イギリスへの譲渡の契約書に署名を完了したのである。かくてイギリスのフィジー島領有は実現したのである。

このときロビンソンはフィジー諸島のウェスレイアン宣教師達に対して次の謝辞を送っている。

「余はいまやフィジー諸島に新紀元が劃され、イギリスの統治下、神の摂理によつて、本植民地に物質的進歩のみならず、道徳上の向上がもたらさるべきことを確信する。過去四十年間、本島において実現された異教の野蠻状態からの大なる社会上的進歩は、全くウェスレー派教会の自己犠牲的にして謙虚なる宣教師達の活動に負うものである。よつて余はこの国における郷等の宣教の事業がさらに活発に、一層大なる成功をとげられることを切に祈つて

やまな⁽²⁾」

註

- (1) 「ハワイにおける布教と文化接触愛容」(拙著『宗教社会学研究』関書院、昭和二十八年、第二篇。「マオリ族における初期の文化接触愛容」(『神戸女学院大学論集』、第二卷一、二合併号)。「タヒチ島における初期の文化接触愛容」(『神戸女学院大学論集』第三卷三号)。
- (2) 太平洋の諸種族は元来文字をもたなかったのであり、その発音を白人がアルファベットにしたのであるから、その綴りには種々の変化が認められることがある。フィジーの名前も次の様ないろいろの綴り方で表わされている。Beete, Feege, Feejee, Feejee, Feeje, Feeje, Fidgee, Fidschi, Fiji, Feigee, Vihi, Viji 及び Viti 等である。
(Thomas Williams and James Calvert, Fiji and the Fijians, N.Y., 1859, P.1.)
- (3) Encyclopedia Britanica, 14th ed, Vol. 9, p. 232.
- (4) Latourett, A History of the Expansion of Christianity, N.Y., 1943, Vol. 5, p. 220.
- (5) Thomas Williams and James Calvert, Fiji and Fijians, N.Y., 1859, p. 219.
- (6) Harvey Newcomb, A Cyclopedia of Missions, N.Y., 1854, p. 721.
- (7) J. W. Burton, Missionary Survey of the Pacific Islands, N. Y., 1930, p. 113.
- (8) John Williams, A Narrative of Missionary Enterprises in the South Sea Islands, 1837, pp. 498-504.
- (9) 莊司憲季著『太平洋島嶼誌』メルクス編、昭和十九年、三省堂、三三七頁。拙著『宗教社会学研究』一八四頁。
Encyclopedia Americana, Vol. 11, p. 204; Collier's Encyclopedia, Vol. 8, p. 40.
- (10) Mission Stories of Many Lands, Boston, 1885, pp. 361-365.
- (11) Martin, Missionaries and Annexation in the Pacific, Oxford, 1924, p. 48.

- (12) 拙稿「タヒチにおける初期の文化接触変容」『神戸女学院大学論集』第三卷三号、八八頁)
- (13) Pritchard, Jr., *Polynesian Reminiscens*, p.p. 211-216.
- (14) Mrs. Wallis, *Life in Feejee, or Five Years among the Cannibals*, Boston, 1851, pp. 24-29; K. S. Latourette, *op. cit.*, V. 5, p. 225.
- (15) Pritchard, *op. cit.*, pp. 300-302.
- (16) Martin, *op. cit.*, p. 51.
- (17) *Ibid.*, p. 57.
- (18) *Ibid.*, pp. 57-58.
- (19) *Ibid.*, pp. 75-77.
- (20) C. F. Gordon Cumming, *At Home in Fiji*, N.Y., 1882, pp. 1-5.

Mizoguchi, Yasuo

The Early Stage of Acculturation in the Fiji Islands

Résumé

The Fiji Islands were formerly the home of a savage people made up chiefly of Melanesians with a minority of Polynesians, who were still in a primitive stage of culture. Cannibalism, human sacrifice, and infanticide were practiced among these islands.

Before the latter part of the eighteenth century white men, such as navigators, traders, and whalers, began to arrive at the Southern Pacific Islands. In 1835 British missionaries came to this group of islands from the adjacent Tonga Island. They brought the Western ways of living as well as the Christian religion and thus brought about a revolutionary change in the primitive ideas and customs in these Fiji Islands. Later the early white settlers and the missionaries were joined by officials of the Western governments, and the influx of the three big powers, namely, America, France and Britain, induced a very complicated sociocultural contact and change among the natives of this district. This intercultural relationship seems a typical example of complex acculturation. The writer's particular interest is in the function of the missionaries in the early stage of this acculturation between natives and the West.